

2013 年度 FD 活動評価点検報告書

1. 中部大学の FD 活動組織について

本学における教育活動・改善に向けた教員の資質向上策としての FD (Faculty Development) 活動は、学長を委員長とした全学 FD 委員会のもと、各学部 FD 委員会および各学科組織があり、全学体制の FD 活動ワーキングが中心となって種々の検討を行っている。また、教育活動顕彰審査選考委員会や FD 活動評価点検委員会が図 1 のように組織されており、FD 活動の内容について評価できる体制が整っている。なお、全学 FD 委員会および学部 FD 委員会は、2007 年度まで本学に設置されていた FD 推進委員会、学部での FD に関する諸活動を 2008 年度より新しく改変した組織である。また、大学教育研究センター（教員 3 人、事務員 4 人で構成）が主管部署として、FD 活動の推進、支援を行っている。

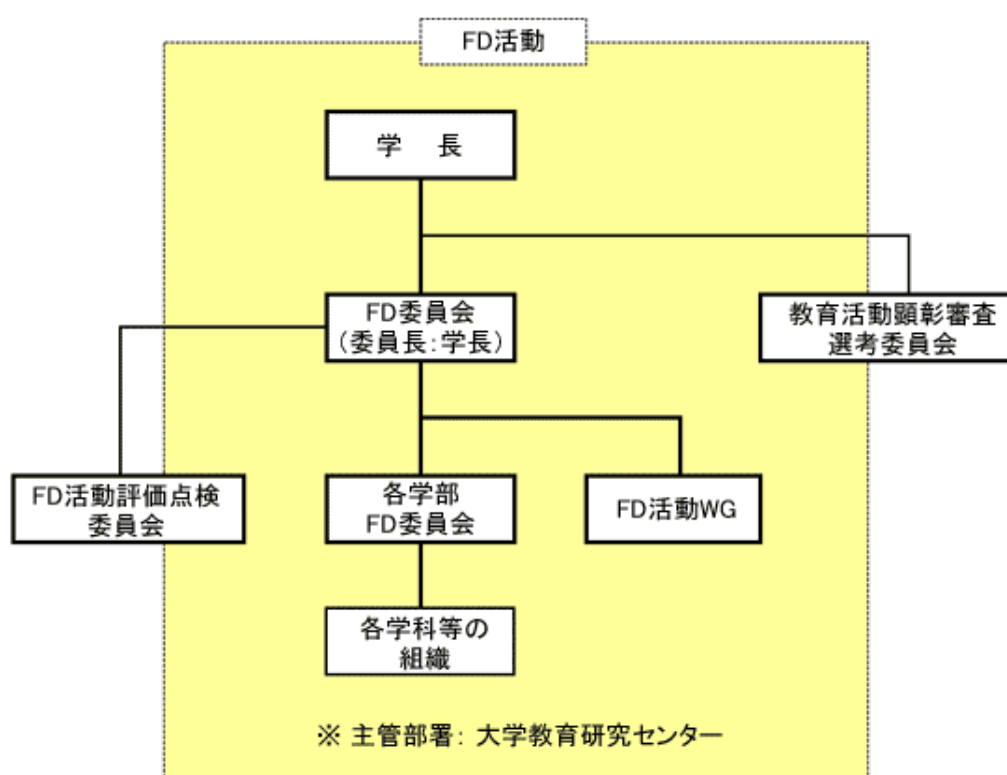


図 1 中部大学の FD 活動組織図

FD 委員会 : 本学の FD 活動全般について、学長を委員長として審議、検討をする。

FD 活動 WG : FD 委員会の専門委員会として、学部代表の FD 委員を中心に主に全学的な活動を企画する。

FD 活動評価点検委員会 : 本学の FD 活動全般について、第三者的な立場にたって評価点検をする。

教育活動顕彰審査選考委員会 : 教育活動顕彰制度に係る重要事項、および受賞者の審査、選考する。

2. 本学の FD 活動評価点検の対象

本学の FD 活動は、次の表に示すように 3 つの観点から分けられる。広義の FD 活動の目的となりうる「カリキュラム改善」や「組織の整備・改革」に関する諸活動は、FD 委員会の所掌事項でないため、これらを目的とした活動（網掛け部）は、本報告書の内容には含めていない。なお、授業担当者のみの授業改善の活動は、「教育活動重点目標・自己評価シート」と「学生による授業評価、教員による授業自己評価」によって実施され、後者は学内向けに HP 上で公開されている。

表 1 3 つの観点でみた中部大学の FD 活動

【※1】 3 つの観点でみた中部大学の FD 活動（網掛け項目は除外する項目を表す）

目的別にみた FD 活動	対象別にみた FD 活動	形式別にみた FD 活動
1) 授業・教授法の改善	1) 全学対象	1) 会議
2) 教員の資質向上（研究交流を含む）	2) 学部対象	2) 研修会・懇談会
3) FD 活動の企画・運営など	3) 学科・教室対象	3) 講演・報告会
カリキュラム改善	(*1)非常勤を含む	4) ワークショップ・セミナー
組織の整備・改革	(*1)学生を含む	5) 制度・システムなど(*2)
	授業担当者	

(*1)：対象別 1)～3) で非常勤を含む場合、学生を含む場合

(*2)：授業評価システム、授業改善アンケートの制度の運用やシステムの構築、および出版などが該当

3. 2013 年度の FD 活動の重点目標

FD 活動の重点目標として 2008 年度より 5 年間を目安とした『魅力ある授業づくり』は、2013 年度以降も重点目標とすることが 2012 年度の FD 委員会で決定され、以下の考え方をもとに継続して FD 活動を進めてきた。

『魅力ある授業づくり』は、学生と教員が協同して行うものです。

魅力ある授業・・・（学生にとって）興味を持って聴ける授業、将来において役立つ授業
 （教員にとって）学生の成長を実感できる授業、学生から感化を受ける授業
 授業づくり・・・（学生が目指す）自主的に学ぶ態度、知識・技術の修得
 （教員が目指す）授業改善、授業スキルアップ
 （学生と教員が目指す）双方向のコミュニケーション

なお、『魅力ある授業づくり』を重点目標にしてきた 2008～2012 年度の 5 年間の FD 活動の評価点検を実施し、その報告書をホームページ（以下 HP）に公表するとともに、「中部大学教育研究」（No.13, 2013）に掲載した。

本学では、評価点検の結果から改善を繰り返し、個人レベルから、学部学科を越えたグループ、学部学科、全学を対象に活発な FD 活動を進めてきた。こうした中、教育実践現場である各学部では、以下のような FD 活動の目標設定を行い、FD 活動に積極的に取り組んだ。

- (1) 工学部・工学研究科
FD 講演会等に参加し、『魅力ある授業づくり』のノウハウを共有する。
- (2) 経営情報学部・経営情報学研究科
 - ①『魅力ある授業づくり』の基礎をなす「学生による授業評価」への参加率を向上させる。
 - ②少人数教育経験交流会を実施する。
 - ③授業改善報告会兼教育活動優秀賞報告会を実施する。
- (3) 国際関係学部
 - ①「グローバルで多彩な外国語教育」を通じた、魅力ある授業づくり。
 - ②「ポートフォリオを用いた多角的視点によるキャリア教育と、少人数教育による学生へのきめ細い指導」を通じた、魅力ある授業づくり。
- (4) 人文学部
 - ①高校と大学との連携を強化し、スムーズに大学教育への移行を図ること。
 - ②フィールドスタディ等を通じて地域との連携を強化すること。
 - ③web や e-ラーニングの利用を含め、双方向型の授業を実現すること。
- (5) 応用生物学部・応用生物学研究科
 - ①学生による授業評価、教員による授業評価、コメントへの回答の回収率向上を具体的目標として学部全体で取り組む。
 - ②『魅力ある授業づくり』に関して、2013 年度より各教員は 2013 年度教育活動重点目標・自己評価シートの個人目標の 1 つに「学生による授業評価」の回収率向上を必ず掲げ、年度末に自己評価点検を行う。
 - ③各教員は全学 FD 講演会その他の全学レベルの FD 支援活動に積極的に参加する。
学科（専攻）等：学科会議、教授会などを通して定期的に FD 情報（教務モニター、授業アンケートなど学生の意見、FD 講演会その他の内容等）の交換を行い、共有化に努める。
- (6) 生命健康科学部・生命健康科学研究科
 - ①「わかる」ことの増加、「わかる」ことが面白い授業や魅力ある授業ととらえた基礎学力の不十分な学生への授業支援を実施する。
 - ②各教育セミナー等を企画し、学部・学科教育に外からの刺激を与える。
 - ③学部全体で授業反省会を行い、授業の課題や問題点を全教員で共有する。
 - ④学生の少人数グループと各教員の連携体制を構築し、学力に合わせた効果的な指導などの教員力を高める。
 - ⑤学期毎にクラス委員と教員の懇談会を開催し、学生からの意見・要望を把握し授業内容に反映させるようにする。
 - ⑥各臨床実習指導者会議を年 1 回開催し、多くの教員と実習指導施設が参加する。実習指

導施設の意見等を学部教育に生かす。

⑦学部単位で「初年次教育学会」に毎年1人参加し、情報収集の成果を報告することをFD活動の一環に取り入れる。

(7) 現代教育学部

- ①授業公開・授業研究の実施
- ②学科・研究科主体のFD活動の実施
- ③教育GPに向けての取り組み

(8) 全学共通教育部

教育科を越えたFD活動はどのようにあるべきかについて議論し、各教育科が担当する科目において、全学共通教育に関わる教員への教育内容・教育理念に関して共通理解の形成（懇談会・研修会の実施、教材提供等）を図る。

魅力ある授業づくり等に向けての取り組み（授業・教授方法の改善、学生による授業評価、教員による授業自己評価の実施率を高める等）のための具体的方法についても検討する。

(9) 国際人間学研究科

文化系が主体をなすが、多彩な学問領域をカバーする構成員からなる国際人間学研究科では、外部との接触による研究・教育能力の向上と、内部における相互接触による啓発・啓蒙の2つが考えられる。このため、二方向からFD活動を推進し、研究科全体のレベルアップを図るように努める。

(10) 教育学研究科

- ①学部と連携した授業改善のための授業公開・授業研究の実施
- ②研究交流会の実施による教員組織の体制づくり
- ③教育モデル構築の取り組み
- ④院生への情報提供ネットワークの活性化

6年目となった『魅力ある授業づくり』は、授業評価回答率のアップや授業力向上などのこれまでの継続的な目標だけでなく、ファカルティーでの情報共有の場を設けたり、学部の特徴が出てくるような目的設定がなされるようになってきた。

4. 2013年度のFD活動の取り組み

4. 1 全学の取り組み

2013年度の全学としての取り組みは、大学教育研究センターHP (<http://www.chubu.ac.jp/FD/>) に詳細が掲載されている。主な取り組みとして、①教員による教育活動重点目標の設定、②授業改善の取り組み、③FDフォーラム・講演会、④FDに関する研修会・説明会等、⑤出版物、⑥教育活動顕彰制度、2013年度からは⑦中部大学『魅力ある授業づくり』プログラムを実施、

また 2013 年度の企画として⑧『魅力ある授業づくり』作品コンクールを開催した。その現状と評価を記述する。

①教員による教育活動重点目標の設定

教員個人の FD 活動を自己点検することを主な目的として全学の助教以上に提出を求めている教育活動重点目標・自己評価シートは、年度初めに、各教員が教育活動重点目標を設定し、年度末に自己評価を行っている。2013 年度の目標設定者は在籍教員の該当者 462 人中 452 人、自己評価提出者は目標設定者 452 人中 442 人であった。

②授業改善の取り組み

『魅力ある授業づくり』のための主な取り組みとして、以下の 6 つを取り組んできた。

1) Web による「学生による授業評価」「教員による授業自己評価」

「Web 入力方式」だけであった「学生による授業評価」に「携帯電話・スマートフォン入力方式」を導入して 5 年目となる。2013 年度、「授業評価」の学生の回答率は、春学期約 26%、秋学期約 19%、教員の自己評価回答率は、春学期約 60%、秋学期約 65%であった。毎年、秋学期学生回答率は、春学期に比べて減少という傾向は同様であった。Web 入力方式とした春・秋学期の回答率ではそれぞれ昨年度まで毎年更新してきたが、昨年度比で約 85%と若干減少し、経年的にみると高止まりの傾向にある。自由記述においても、春学期 3,105 件、秋学期 2,078 件と同様に高止まりの傾向にある。

授業評価の回答率については、学科による違いが大きい点は以前からあまり変わらない。学部での意識と言うよりも学科での教員と学生の両者の「授業評価」を通したコミュニケーション意識が求められるところであり、その学科で学ぶ学生の帰属意識にも繋がるものと考えていく必要がある。

2) 携帯電話を活用したクリッカーシステムの提供（授業改善アンケートシステム）

携帯電話による「授業改善アンケート」を援用し、授業中、教員がネット環境を使える場所であれば、学生の反応を瞬時に把握できるクリッカーシステムである「Cumoc（キューモ：Chubu University Mobile Clicker）」を導入して 4 年目となる。研修を行うなど教員が利用しやすい環境とするために 2011 年 7 月に新たに「CumocL」を整備し、2013 年 4 月にはアンケートシステムとして学内に提供を開始した。

なお、「授業改善アンケート」は、秋学期のクリッカーとしての活用を含めて通年で 198 件の利用であったが、今後、更なる活用の増加が期待される。

3) 授業改善ビデオ撮影支援制度

授業担当者からの希望による授業ビデオ撮影支援制度の 2013 年度実績は 17 件で、授業サロンにおける授業担当者の振り返りのための撮影 10 件を含んでいる。

4) 授業のオープン化制度

授業担当者に申し出ること、他の教員が授業を参観できるシステムであり、後述の「全学公開授業」「授業サロン」もこの趣旨を基に実施している。

5) 全学公開授業

「全学公開授業」を 4 件実施し、延べ 33 人の教職員の参加があった。

6) 授業サロン

「授業サロン」では、学部間を越えた5人の教員による授業見学とピアコンサルティングを行っている。学部間を越えた5人の教員による授業見学とピアコンサルティングを行う「授業サロン」が春学期1グループ、秋学期1グループ実施され、授業の振り返り、また授業改善のヒントになる点などが意見交換された。今回で12グループとなり、延べ人数で60人の専任教員が参加したことになる。着実にFDネットワークの構築に繋がり、本学のFDの特徴を表す取り組みとしても、外部に発信された。

7) FD カフェ

「FD カフェ」は、教職員による自由な意見交換の場である。大学教育に関するさまざまなテーマ、学生と直面している必要な知識などの実践的なテーマに関して自由に意見を交わすことで情報やスキルを共有する場を提供することを目的として開催されている。2013年度は春学期2回、秋学期2回の計4回開催された。学生支援、双方向授業、教授法、アクティブ・ラーニングの話題を取り上げ、全国私立大学FD連携フォーラム(JPFF)が提供しているオンデマンド講義の活用も含めて実施された。非常勤講師の参加も多く、普段、教職員が気軽に情報交換や意見交換を行う場が少ないため、グループの中で互いの教育力向上を目指しての議論や同じ悩みなど情報共有を行ったことが好評を得た。

③FD フォーラム・講演会

教育現場における著作権、大学における内部質保証、また、大学の総合力についての計3つのFD講演会が開催された。教育現場における著作物についての講演では、曖昧だった教員の認識に明確な方向性を示唆した内容であった(参加者84人)。大学における内部質保証の講演では、大学機関別認証評価を2014年度に控えている本学においては、個人と組織における自己点検評価から改善へ繋げていくことの重要性を再認識することになり、大変有益な内容であった(参加者60人)。さらに、大学の総合力については、本学の元客員教授であった講師からの講演でもあり、参加した教職員が本学の学士教育のあり方について改めて考える場になった(参加者54人)。いずれも、近年の注目される高等教育における話題で、今後の各教職員の活動に何らかの良い影響が期待された。

④FDに関連する研修会・説明会等

毎年行われる年度初めの新任教員説明会では、学長、事務局長、大学教育研究センター長から、本学の建学の精神、大学理念、本学のFD活動等が説明されている。

また、「話し方・板書の仕方」など教職スキルのワークショップであるキャリアアッププログラムを実施している。元アナウンサーの客員教授を講師として迎えて「話し方」に関するプログラムを3回開催するとともに、先述の「授業サロン」にもおいても授業中の話し方についてアドバイスを受けるといった授業スキルについての実践的研修が進められた。また、学生への対応という意味で、学生の特徴と学生との接し方や、相手を意欲的にする褒め方、話を盛り上げるハンドジェスチャー、またマイクロティーチングといったワークショップ形式のプログラムを計4回開催、学生の反応を把握できるクリッカーシステムである「Cumoc」の使用法に関するプログラムを1回開催した。いずれも、本学のFDキャリアアッププログ

ラムのプログラムメニューとしての形態をなす形に成長しており、繰り返し開催することで非常勤を含め、多くの教員が体験できるプログラムとなっている。

FD に関連する研修会等、キャリアアッププログラムに非常勤講師の参加が多いのも本学の特徴といえる。こうした実践的研修に、特に教歴の浅い教員がこうしたプログラムに積極的に参加できる環境が必要とのことから、後述する「中部大学『魅力ある授業づくり』プログラム」を実施し、教職員の研修を奨励している。

⑤出版物

「教育・研究活動に関する実態資料」「中部大学教育研究」を発刊しており、前者は様々な基礎データを集約し、学内各種制度や対外的な申請や審査の基礎資料として活用されている。また後者は 1979 年より発刊されてきた「教育資料」を充実させ、新時代の大学教育の理念・手法・改善策などを論じ合う場を提供し、教育改善・質的向上に役立てることを目的に 2001 年から発刊されており、教員の情報共有の場ともなっており、特に研究論稿は教育研究の分野でも数多く引用されている実績を有している。さらに、大学の情報公開資料作成の一部に利用されている

⑥教育活動顕彰制度

2008 年度より学部における評価項目の重みを増加し、また個人だけでなく団体、グループに対しても表彰できる特別賞を取り入れた「教育活動顕彰制度」を導入し、毎年前年度の教育活動について表彰しており、2012 年度の「教育活動優秀賞」は 18 人、「教育活動特別賞」は個人 1 人、組織 1 グループが受賞した。実施要項、審査総評等は HP で公開されている。

⑦『魅力ある授業づくり』プログラム

すべての教員（特に教育歴の少ない教員や新たに本学に赴任する教員）が持続的に教育力の向上を目指すことを奨励し、FD プログラムへの積極的な参加を奨励するために、FD 委員会が主催している FD プログラムを活用して規定の要件を満たしたものに対して、本プログラムの修了証を授与している。規定の要件については、リーフレットや HP 上で公開されており、3 年間の間に授業サロンまたは全学公開授業実施を必須としたポイント制をとっている。2013 年度は暫定措置とし、過去 2 年間の実績に基づき、2 人の教員が修了した。さらなる本学の特徴ある FD プログラムへの積極的な参加を促すきっかけになることが期待される。

⑧『魅力ある授業づくり』作品コンクール

2014 年、開学 50 周年を迎えるにあたり、本学の教育活動重点目標である『魅力ある授業づくり』を更に推し進め、学生・教職員がともに授業を考えるきっかけづくりとして、学生を対象として『魅力ある授業』をテーマとした作品の募集を行った。その結果、小論文・エッセー部門 16 作品、俳句・短歌部門 24 作品、漫画イラスト部門 26 作品、ポスター部門 2 作品、計 68 作品の応募があった。これらの作品から、教学に関わる教職員 24 人と学生公募審査員 20 人、教職員公募審査員 11 人による第 1 次審査、学長を委員長とする FD 委員会による第 2 次審査を経て、15 作品を優秀作品として決定した。受賞作品集を冊子として作成、

配付（HP でもデジタルブックにて公表）した。また、学長を囲んでの受賞者との懇談会が開かれ、本学の魅力ある授業について学生の生の意見を聴ける場となった。

4. 2 学部・研究科での取り組み

各学部・各研究科において FD 活動評価点検報告書が作成されており、ここには提出された報告書から 2013 年度の学部・研究科・学科での FD 活動の特記すべき事項を①授業・教授法の改善に関する取り組み、②研究交流を通じた教員の資質向上の取り組み、③その他の取り組み、の 3 つの目的別にまとめた。

①授業・教授法の改善に関する取り組み

- (1)学部での FD 講演会の開催（工学部/工学研究科・人文学部・応用生物学部/応用生物学研究科）
- (2)学部での研修・セミナーの開催（経営情報学部/経営情報学研究科・国際関係学部・現代教育学部/教育学研究科・全学共通教育部）
- (3)教育関係のアンケート（全学共通教育部）
- (4)授業反省会（生命健康科学部/生命健康科学研究科）
- (5)授業の実施改善例の報告会（工学部/工学研究科）

②研究交流を通じた教員の資質向上の取り組み

- (1)教員の情報発信力向上を目的とした講演会・シンポジウム（国際関係学部・国際人間学研究科）

学部・学科独自での公開授業の報告は 2013 年度にはなかった。「全学公開授業」「授業サロン」は、専門外の授業を参観することで、授業運営に視点がおかれる一方、学部・学科内では授業内容について触れることが多い特色を有することから、両者のバランスも必要であろう。工学部/工学研究科の取り組みで授業の実施改善例の報告会が開催されているのも目新しい取り組みである。

また、各学部からの FD 活動に関する課題については、1) 講演会・セミナーに参加する教員の固定化、2) 学生のメンタルな問題についての情報共有と教員の連携、3) 学生の入学から就職までの人材育成への取り組み、4) 各教員の FD への取り組みの見える化の必要性、5) 教員顕彰制度における学部内の調整、6) 教育科目の重要性についての学内外の認識、などが挙げられた。

4. 3 2013 年度の FD 活動の取り組みの傾向

2013 年度の本学の FD 活動の目的別、対象別（参加対象別）、内容形式別にまとめたのが次の 4 つのグラフである。2013 年度から会議・打ち合わせをこのデータからは外している。図 2.1、2.2、2.4 は重複しているが、FD 活動の目的、対象はバランスがとれているものと判断される。内容形式については講演会・報告会が多いが、ワークショップも増加している。図 2.3 より、学生参加の FD 活動の取り組みがやや増加していることも 2013 年度の特徴でもあり、こ

れまでの学生参加型の FD 活動の課題に対して対応した結果ともいえる。

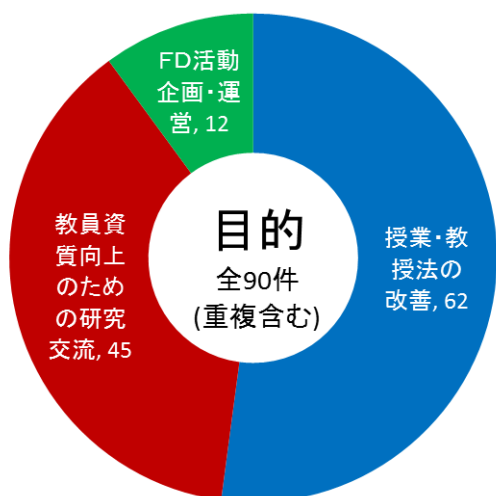


図 2.1 目的別にみた FD 活動

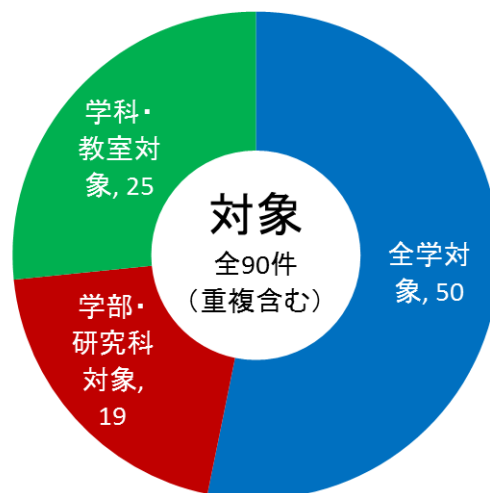


図 2.2 対象別にみた FD 活動

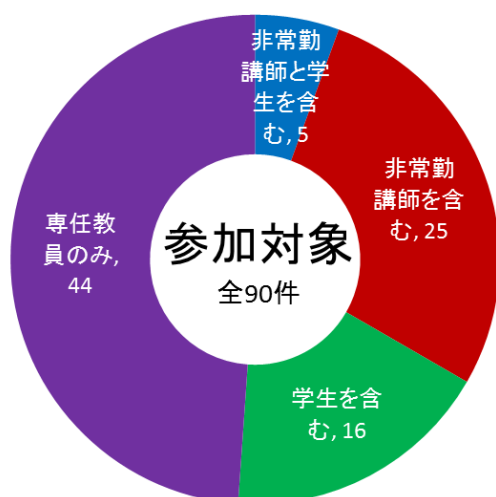


図 2.3 FD 活動の参加対象

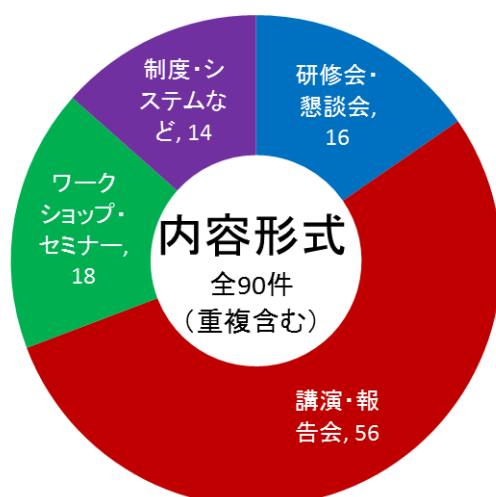


図 2.4 形式別にみた FD 活動

(※合計件数は、重複項目があるため一致しない)

5. FD 活動に関する課題と今後の計画

2013 年度も『魅力ある授業づくり』の重点目標を挙げて活動し、全学では昨年度末から始まった「FD カフェ」は学部・学科を越えた教職員との意見交換の場として浸透しつつある。また、『魅力ある授業づくり』作品コンクール」など学生参加の FD 企画を通して、教職員や学生の考え方が共有できたことも有意義であった。一方、授業評価の回答率では、高止まりの傾向がみられた。回答率の学科間の格差は開いたままであり、学部・学科を越えた教職員の FD ネットワークや学生が参加することで、教員と学生の意識改革に繋がることを期待される。また、本学の FD 活動を推進していくうえで「中部大学『魅力ある授業づくり』プログラム」の修了者が今後増えることを期待したい。